

危ないものほど、安全。 安全なものほど、危ない。

たとえば映画『パール・ハーバー』に対して「あれはマンガみたいだ」と言う人がいます。

戦争状態にある時に、あんなチャラチャラした恋愛ドラマをやっているわけがないという見方です。

でも、ハリウッド映画のすごいところは、ちゃんと史実に基づいたうえでのフィクションをつくり上げていることです。

実は当時のアメリカは平和ほけしていたということに、日本人はまったく気づいていないのです。

真珠湾攻撃が起きた時のアメリカは、まさに平和ほけの頂点にありました。

真珠湾攻撃が奇跡的に成功した理由は、日本はすでに臨戦態勢にあったことです。

第1章 成功の中にある失敗に、気づこう。

昭和12年からは、中国との戦争が始まっています。

アメリカは、第一次世界大戦にも参加していたとはいえ、勝負がついたところで加わったので、それほど危機感はありませんでした。

しかもそれは、アメリカ本土ではなくて、海外での戦争に何人かが応援に行ったというぐらいの参戦にすぎません。

一般庶民も、現場の兵隊レベルも、アメリカ国民自体は、戦争に参加したという意識よりは、オリンピックに参加した程度の意識しかありませんでした。

零戦が飛んで来ても、「また味方が何か演習をやっているに違いない」というぐらいののんびりした意識しかありません。

だから、まさかの事態にパニックになって、思うとおりの反撃ができなかったし、被害も大きくなりました。

日本の歴史の中で、日清戦争より前に外国と戦ったのは薩英戦争です。

これは薩摩藩がイギリスを相手にした戦争です。

この戦争では、イギリス軍は予想外に苦戦しました。

なぜならば薩摩藩は、関ヶ原の戦いで西軍に味方して負けて以来、江戸時代の260年間、いつかは徳川幕府を倒そうという臨戦態勢を保ち続けた藩です。

ということとは、薩摩藩にとっては戦争はまだ終わっていないかったです。

薩摩藩は、関ヶ原の戦い以降のリベンジがまだ終わっていませんでした。

だから、「いつでも戦うぞ」という意識もあったし、密貿易をして外国の情報を得たり、物資を得たり、兵器をつくったりという臨戦態勢に常にありました。

ある意味では、徳川幕府よりも薩摩藩のほうが、グローバルレベルの危機意識が高かったのです。

この話を現代の会社に置きかえて考えてみましょう。

倒産が起こる時に、2つの状況が考えられます。

「うちの業界は危ない」、「うちの会社は危ない」と思って起きる倒産

「まさかうちの会社が倒産するとは思っていなかった」という状態での倒産

被害が大きくなり、社員が立ち直れなくなるのは、「まさか」のほうです。

「まさか」という会社は、そこそこ調子がよかったのです。

前からずっと調子が悪くて、いつ倒産してもおかしくない会社が倒産する場合は、意外に立ち直りも早いのです。

社員のショックも小さくてすみます。

業界自体は調子が悪くないのに、なんであんなことになったのかという会社ほど、

第1章 成功の中にある失敗に、気づこう。

大型倒産になってしまいます。

反対に、あの業界は危ないに違いないとみんなが思っているところは、その業界の人もわかっているから、意外に危なくありません。

危ないと思っただけなら必ず何か準備をします。

準備した段階で、準備していない会社、つまり緊張感のない会社とは圧倒的な差がつきます。

具体的に準備をしていなくても、「うちの会社はいつ倒産してもおかしくない」と内部の人たちに思われている会社は、倒産しにくいのです。

個人レベルで言えば、「自分はいつリストラにあってもおかしくないんだよね」と思っている人はリストラにあいませぬ。

「まさか自分がリストラにあうことなんてありえない」と思っている人がリストラにあってしまうと、ショックが大きいのです。

戦争の例を出すと、「あの人は戦争好きなんだ」と言われてしまつのが日本の現状です。

たしかに戦争はいけないことですが、平和な世の中にするためには、戦争のことについて考えなければいけないのです。

平和にするためには、平和のことをいくら考えてもダメです。

戦争のことをとことん突き詰めて考えることによつて、平和を維持できるのです。平和状態というのは、戦争の危機において最も高度なレベルの状態です。

つまり、いかに戦争しないでいられるかということが、戦争の最高の目的です。それが平和という状態です。

結果としての平和をいくら考えても、平和にたどり着くことはできません。

成功したいと思つている人が、成功したらどんなにすばらしいかということだけをいくら考えても、成功できません。

成功するためには、どうしたら失敗を防げるかということをつめて考えていくことが、成功への近道なのです。

戦争について考えることは究極の危機管理です。

危機を乗り切つて生き延びるためには必要なことなのです。

スピード
危機管理

その②

「ここは大丈夫」と考えているものを、
再チェックしてみよう。

ネバー・セイ・ネバー”。

危機管理に関して言うてはいけない言葉は、「絶対」です。

「絶対」という言葉を使う人は、ある報告を聞いた時に、「絶対そんなことはありません」と否定してしまいます。

そうすると、まず報告が伝わらなくなります。

次に、その事態への準備ができなくなります。

だから、「ネバー・セイ、ネバー”」です。

「絶対」を言うてはいけません。

「絶対」という言葉には、「ありえない」という言葉が後ろに続いてしまいます。

「絶対ありえない」と思うのは、「ひょっとしたら、そんなことが起こるかもしれない」と頭の中で浮かぶことを否定してしまう発想です。

だから、「絶対」という言葉を使う人は危機管理が苦手にがてなタイプです。

会社の中でも、「絶対」という言葉が好きな人は柔軟性に欠けている人が多いはず
です。

いざ何か起こった時にパニックになったり、トラブルに弱いタイプです。

自分がトラブルに強いタイプになろうと思ったら、「絶対」という言葉を使わない
ことです。

今の世の中は、思いもよらないことが突然起こります。

自分が想定したことになかった事象に出くわしても、「こんなこともありうるんだ
な」と思った時点で、その危機は乗り越えることができます。

これが、変化に強い人の条件です。

「あの人はヘンな人」と言つのは、残念ながらほめ言葉ではありません。

変化という言葉に象徴されるように、変化の「変」も、「化」も、ネガティブなイ
メージでとらえられています。

変化をネガティブなイメージとしてとらえてしまうと、危機への対応がアマくなっ
てしまいます。

危機管理では、「自分はどこが弱いのか」ということに気づくことが大切です。

スピード
危機管理

その③

「絶対にない」と考えるのは、
やめよう。

軍人のせいで負けたのではなく、 官僚主義のせいで負けた。

太平洋戦争は誰の責任で負けたかと考える時、ほとんどの人は、「軍人の責任だ」とか、「東条英機の責任だ」と思い込んでいます。

でも、軍人のせいで負ける戦争はありません。

「ドイツが負けたのはヒトラーのせいだ」ということでもありません。

日本が太平洋戦争に負けた理由は「官僚主義」のためです。

発展途上国なら官僚主義にもいい点はありますが、当時の日本にあった腐った官僚主義が敗北を招いたのです。

これは太平洋戦争に限ったことではありません。

今の日本が戦っているのは、構造改革という名前のもとで腐った官僚主義をいかに乗り越えていくかということなのです。

そうしなければ、経済や文化の戦争で、日本がまた太平洋戦争と同じような過ちあやまちを繰り返してしまいます。

もし軍に責任があったとしたら、当時の陸海軍が腐った官僚主義に陥ってしまったことが、日本の敗北につながったのです。

その一例は、「真珠湾攻撃は宣戦布告前に攻撃した違法な奇襲であり、卑怯ひきょうな行為である」というマイナスイメージを残してしまったことです。

真珠湾攻撃は、ハワイ時間の12月7日の朝7時55分に始まりました。

本来なら東部時間の午後1時に、アメリカにある日本の大使館から、アメリカに対して正式に宣戦の布告書を届けるというダンドリになっていました。

ところが、その報告書を渡すのが1時間20分遅れてしまいました。

これによって、「日本軍による真珠湾攻撃は奇襲だ」と言われるようになってしまいました。

戦果を上げたとしても、道徳的に敗北を犯してしまったわけでは

世界的なイメージとして、ちょうどアメリカに同時多発テロ攻撃をしたとされるアルカイダと同じ立場に日本が置かれてしまったということなのです。

宣戦布告書が遅れた理由は、腐った官僚主義のためでした。